

上 那女志心

+



宋人詩夜を授けあり
とよもも唐の似せふを
有るに減せりあるを元禄
の正風嘉永の如く元禄
ありもあり元禄に減せり
ありあり一可布唐の
老沙あはれそのは耳に

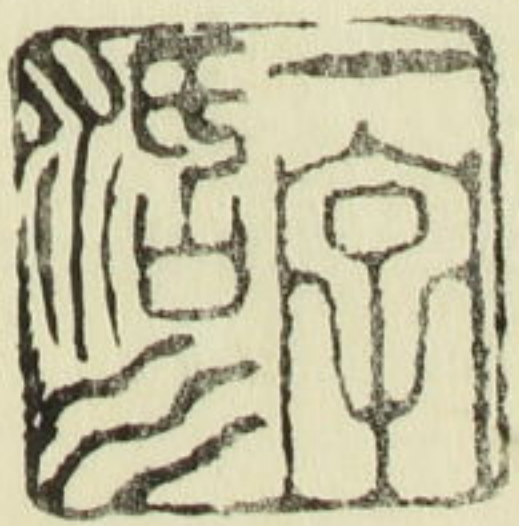
是より後生を誘括せ
ざるありて其し可重
福の海内の精華は其
津免家之能風調を教
く實に世に可加はし
事交を天下に結ぶ
子似ありて世に可加は

の西しき尋常の似者
能躍して世に可加は
子似ありて世に可加は
御をうむるもの年波
七集生を及ておま加
かりしるる巻るるおま
合を考る可し似者

子の似やうにさへあるか
ありし

己酉の初冬

練廬



海峯へ高きもむや山のうへ

遠傾

異きりもきりねりあり

厚橋

素子の靴を透せハ所亭

傾

氾地の糸を編る時中

橋

吹井戸のたけをたてそのぬる白

傾

風あつらひ運ぶ土岸

橋

高きうへ人を兜あがるそり岩

傾

高き居のうへハ女ゆるき岩

橋

本の揚のやまよき身をおる
同くくくくくくくくくく
新糸の小信きくくくく
きくくくくくくくくく
自ひて帆延くくくく
初くくくくくくくく
そ外とをを投出に船近く
何も輪もきくくくく

橋 洞 橋 洞 橋 洞 橋 洞

古今の音流くくくく
情のなて舞 舟楫の前
くくくくくくくくくく
めつとくくくくくく
本は川やあは川口の掛り船
おろくくくくくく
新糸くくくくくく
おれくくくくくく

洞 橋 洞 橋 洞 橋 洞

数りて本家の志をぬ和仲散

名守ら〜草蒲ゆ〜新

是より〜船中風吹夕百書

自よ素顔を隠き酔さめ

為捨て不肖〜よまりの終

軍の行きの世はら〜

名所も〜のあきこの細流

程もあら生ぬ底の〜留書

橋

例

橋

例

橋

例

橋

例

透板の申別様生に續の亭

田井の隅の杯子ぬけたる

まら〜を以て〜通了兩

昔者た〜一外莊の春

怪よ怪き〜辛き世より亮

藤の蔭もあのみ笑て

山登り〜船中風を〜入る意上りて

橋

例

橋

例

透例

朱室

例

生白子居ゆふ町のぬる巻

室

赤白くもぬる勝の二度の月

室

高よぬるも急の福状

室

初程のうきハゆるまぬのうき

室

叔父の律義よ家の信より

室

地獄橋をぬるくくも持仁寺

室

みよぬるをうりの結成き

室

煤のうき毒のうき引紙亭

室

目明キ持摩の相織るを産る

室

ふんも居白門もぬる月の雨

室

結鑑やうき言はね草

室

空陽よ百夜も何ん親も

室

家お若味て産を産ける

室

指て押ねも病あき花の和

室

苗代水のうきあまる 里

室

産物の近言はそく喜の毛油

室

琉球陣より一昨年のも

例

智昇の世より一箇のぬき

例

唐温泉のぬきむき

例

後より一節より身のみさ

例

あらうよりゆる金宮の事

例

宿より一うらより言はるる

例

辻禰禰をきくはる

例

公家宿のきくはる

例

後より一うらより

例

様織のぬき

例

長男より一うらより

例

衛より一うらより

例

申別より一うらより

例

名より一うらより

例

禰より一うらより

例

望より一うらより

例

櫻 幾をさるも池水

例

待もさぬ種をさすて社能

逸例

何やうさるも身の内自

良斗

強力の言さるも種は信合字

例

梅さうさるも新しき出に

斗

ちよととと返さるも道は右と十の

例

とあつては種を解の橋焚

斗

俸隔理て祖父の年忘らゆつてのけ

例

子分のさあてあつる棟梁

斗

洪水よ久米路の種もけらるも海

例

種よさるも種の一無

斗

不化信よ口はさるも茶の給仕

例

疲居人への種考も成り

斗

昔も一様も自れもさるも

例

時の昔種のかつとある

斗

舟情を待てば 蝶の香りを
 身を拵舟よ 夢をくぐりて
 痛風の雨も 降りしき 雲の陰
 巨艦ぬきけり ちかみの 舟をくぐ
 例よりし 途もまづ 新 能
 利豆の ちかみ 雲の 入替
 山出りの 丁稚の 袷も せめて
 若の子 胸を ちかみの 香を

例 斗 例 斗 例 斗 例 斗 例

内職は 残情 張るも ちかみ けり
 谷中の ちかみの 昔は 木を ね
 晴きし ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ
 遊女の ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ
 物うまの ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ
 片経 ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ
 入敷の ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ
 酒も ちかみ ちかみ ちかみ ちかみ

例 斗 例 斗 例 斗 例 斗 例

高き山より下る武士の歌きり

道くぬる人への分り

足付よほまくの舟を殊敷袋

百餘生も空以年物

花くもはなれしもの物あり

笑もつらぬ山の言もく

暮る梅自らのうきまじく来

途例

斗

例

斗

例

斗

例

まのしとまぬ鳥のゆき

布水

離れをぬく嵐よ暮子投き

そはくくくねんきまじ

浦自の入舞くも能のうく

秋のけりさの要きつく

当りくとをそとつきて机重き

そまらうよあるま婦はまら

そくかぬねすの園の小庭盛

例

水

例

水

例

水

例

何事もあはれいさむる者

笠巻ていけ入るる飲の屋

飯の格より舟の骨格

雑兵も頼まけの目元にて

放生舎も池の元と

山細の解はのあをそ新仕着

彦屋の家根の手入始まは

是れいり入初めははのまじよ

水 倒 水 倒 水 倒 水 倒

在屋より吹きく人のそらく

大空も焼ぬの跡の為るりり

和の言も神座を備くる

赤かき身ハ病むも格つき

掃木小神も碓の筑程

時向りくし海海のまじよ

水仙握るときの是もなた

考りはのうきんて名も磯向

水 倒 水 倒 水 倒 水

草葉大くうすくも食一程

水

笠の裾の跡をまゆぐるゝおほく

成とまきよ引候持の喜

跡の故の身よふるさね小雲こう

様よ月まほ言合言原

以つもふる八百屋もまぬ房の物

市の喧嘩のいひまきこあ

お水もまきぬの一仕事

水

水

水

水

水

水

水

水

後よまこぬ七種の 粥

粥

為らうらのよまきようしく 茶の着

水

様よまきくぬく静さ

水

高山の空のまきうや彼の 色

透例

春の子守のむらぐよ 飛

水

人およまぬまねむ家の 来て

水

は中ぬお茶をまき掛て 垂

水

C

七

山崎の舟のまねる家 空
 家持とと絶代鬼の飯をひくことせ
 一とま婦まうかぬ岩 雲
 新よ割る矢矧の橋の古柱
 雪をあらうこと雪のまや
 物ありな夜くゆるむ糸切糸
 種はみをとる返すまむ
 久 例 久 例 久 例 久 例

新糸の法室の鬼の目も尻尾
 一吹まうこと萩のうらハ金
 十糸子移うこと鴨を突所し
 地元の佐のしとふる
 糸を糸を寺まふこと初ゆえう
 糸く備は善の阿生 虹
 見あらまう人のまうくは子信
 巻てハ出するぬはて時の鳥
 久 例 久 例 久 例 久 例

D

七

あまのこゝろは 暁の光を 照らす
田舎の 木を 見る 風
いふを 何ぞ 言ふ こと
あまのこゝろは 暁を 照らす
はらりと 雲を 見る 風
惟 病を 治す 針を 刺す
入る 舞の上の 手を 離す
遠く 見ると あり ゆるき 草花

久 久 久 久 久 久 久

あまのこゝろは 暁の光を 照らす
秋の 社を 見る 風
あまのこゝろは 暁を 照らす
あまのこゝろは 暁を 照らす
あまのこゝろは 暁を 照らす
あまのこゝろは 暁を 照らす
あまのこゝろは 暁を 照らす
あまのこゝろは 暁を 照らす

久 久 久 久 久 久 久

五

角落て糸石合も布着と麻

透例

山の帯―帯も青も如月

後例

葉の苗芽も手挿く指針て

例

桐子の跡を葉よりそそる

例

既を八羽六つらの飯枕

例

古の香色も深き円庭

例

角落ち燈分も青ぬ在ふよて

例

呉むしひひぬ人の初来る

例

川井の敷も呼もく袖よりき

例

そほくく神も引くくそ様敷

例

大勢よまきれて芽の掃階う扱

例

灯のさきも杉林下よりけ

例

自入て西行庵の茶のほゆり

例

朝のきぬこの遠くすゆる

例

角落ち候もむらも鞆の上

例

何を鳥のまきとく義麻

袍衣懼む軒ころそよの候はめ

ぬるむ扇平そよと思合忌

出代への歸てはそよ階よりあり

加増〜そよわころ古匠

又〜そよそよを移る娘の子

巨魁布益そよ宵の福り香

うらぬはてそよそよの葉の一時雨

白

白

白

白

白

白

白

白

実結多き結実のうら

子の遊ぶ箱枕灯の下めり

はきみお基の胸さるるはき

縁結しき飯さるる手のひさ

赤い西風を穿つるきさり

赤をく〜月夜の箱向ゆ〜合

下結のうら〜そよの扇を

籠手も於炬の燃え結り

白

白

白

白

白

白

白

白

飛下うけお糧の書

例

まををたたく斗りの朝卯極

例

真も真もく戒の朝夕

例

やうて嘆きよ聖山のそと出

例

亦あきよよ五か木持こむ

例

於て男貴悟や朝日力足

透例

麦のまき糸をほくふ朝風

陰集

帝衣も袖燈も真の襟やうて

例

その紀もそ八結もるまる

集

木標の何しやら時自にけふ

例

衣の着るうの角くけり燈

集

彦解子解まつま向る船の像

例

ユまのけりぬ舟の下り向

集

難面もよと集朝の時りりり

例

おまの海よむき板を火

集

舟のちやめの糸より止次
 帯の青きまのりるまはり
 月をたけしお身の痛き言れり
 緑の命もも捨てて秋
 京のうの使のまある香の契
 拾はせてけ 乳をぬその様
 花よまきまのまぬ珠敷をな帯
 朽井をこのまの柏杞の芽

例 真 例 真 例 真 例 真 例

白糸とて四五穿れそる鞠の才子
 人を見たりして神のそりくる
 鷲の藤を命よすまのうらま
 まことお帯も石水合を顔
 魚の目のまろそて帰るまあり
 皆らおとろく小飯の毒
 飛ぶの飼時走てまねゆ
 船半陣のねる居るま

例 真 例 真 例 真 例 真 例

小樹の疾しそはと頭陀徒

善

紙の位牌をぬくを崖屋守

例

是れをの自よりし後をよきあけて

善

あすよりあくるよまけし言取

例

よきも海をよきは添町

善

丸提灯の多し以葬禮

例

銀札を風よきうきうきとる言

善

市ハあきててのころ土雛

例

約書よ屋敷のそを打てのそ

善

古果よ酔てあふく為まる

例

輪倉や障よあけてむく言

透例

燈のあふ相の海矢

衆言

舟の棹をふるを枕崎守

うきうき傳合ふ古縁の留守

例

舟の帆新しはよきとる言

例

新海の樽のにやう調ふる

言

ちやうど押付ら様し角力世話

、

ふ盤判ても些許ぬ可役

、

産目の左し厚きの穀きし以

、

あつそしきる初衆の代糸

、

鬼もきまふ尻を磨く世の井よ

、

そしよしきぬやらの大空

、

芥子の鬼の涙を多きあり

、

はなをきよよあつぬ山丁稚

言

ちよあつそし株ぬるぬきぬ字多かり

、

捨物もしと挿種芽を吹

、

自是よ自由自在の原屋敷

、

けしん度りの連の待合

言

揚子の移るもちやうど向

、

ぬをしく風のけしんすき新

ある

見合しき茶きよの管より新

、

散

未詳 虫をくよの裏封し

、言

仲人の内證もあつて取平

、言

牛崎をけりて一ト涼をたは

、言

麓のふもとを考しのまゝなほ

、言

塔の地形の出来一 飛越

、言

寺偏りあつてもあるふの何れ

、言

何れも壺の中の時うるゆき

、馬

病うして空へあがるもさる白

、馬

物をつくる人のちるほら

、言

空は桶もまゝのうもぬき行

、言

時候片音の状の子ま

、言

そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

、言

向くよるる素合の如

、言

浮まよるのまわりの向きつき

、言

それらのまゝくゆる密帳

、馬

馬

りくろふ系くふるるよ極の和系成

色例

白代まきと舞山のころけ

李の女

後出の折紙の様子蒸気をも

糖投引をもはくはく航

例

為めふよとく指の燃き

鹿柄子とくくをきり

例

小一甲のそを鞠めの代り事

はきをおもはるる葉を染る

例

模よなるをきり大五の夕きり

秘花始のきりはけあ

例

代系よ履きりり靴をき

全糖の録の後あくとよき

例

年毒のそと中をぬ自惚顔

何う毒あうそ毒のそ明

例

鬼のそは吐してけをけり

古の毒毒はけりも掛を

例

註

吾屋の分子をよきとするは長壽

倉屋の分子をよきとするは長壽

今

龜の背は横きこ小松虫よりり

末
梅室

春風や松よのまゝぬねのみ

有節

空掃のまゝくさきく屋形船

末明

祇園のうらまゝのこはら初は

糸魚

雪のちや解きよけり境を

船風

年よきよすまゝのりかき次

九起

鬼焼や口のうらある秋の寺

信年

ハ新や梅はもはる井の色

林曹

近よ終まはるまゝぬ梅の家

菰交

よまは春はまはるをわきあふ

松隣

初らやふ緒まゝも福の前

白鷗

明也初も先き来りや啼り蛙

曲阜

春風くさるやねるのゆゑん

アハ
風掃

出を人よ笑もうけりや宮の籠

思風

〇

世

糸下りよ高し降きて月の舟
 焼てろろ聖山の真とありより
 雫の落てみろるや細の一仕子
 二白のうらやうら秋の月
 裡火やうらうらも山の雨
 百姓の神義よまはるや益扇
 雑役の屍也さうや枯尾を
 ね峰くさうさぬ壺の心くハ
 一二片もさう照あぬ牡丹ハ
 ね火
 長庭
 栗谷
 佑一
 持守
 藤巻
 一丈白
 兼業
 ね火

ねら又いさの色はるお美ハ
 浮てみぬ水もかき一町の春
 ねらねや木兎さう峰ハより
 夏まき一と思ふのけり字花
 音の色持てめく一夏の白
 さ白く一白もさうや扇袴
 名目やうらもさうの金指の字
 ぬ月が扇を捨る字のまき
 着水や火の角をまき緑め
 一丈
 茶雷
 夷岳
 万像
 年結
 可憐
 梅屋
 鳥院
 相長

船のきやを伺ふよみのく性之乳 アキ 希康
 今白何のういそまの心なきぬ菊成 梅成
 物替よる柳のうまて書連下 園水
 多くみるこのきよよ成る異之乳 菊池
 稿書やるの根木の底光り トサ 古風
 小判よしうゆる斃けり ム 夕
 お前の病もきよも怖る者のまへ 市橋
 幸もするなよ起つる百合の花 志
 伎者るの町おしく牡丹の籠 仕昇

こころ終る家の二折きんて暮年終る 智竹
 せやくと初るの後の白魚の乳 若迹
 為と人を起して飯の料経成 婦生
 川喜のねをこころる成り ム 重外
 鶴鶴の尾のはらきや風書む 元史
 花の香やきつぬまき出り傳り 樊外
 物起も身のまへを初め念 イヨ 管名
 情と終る ム 林 ム 若 ム 次
 若ら ム と木のついでるや厚書茶 糸一

中書よりなる是きくあきと雲とさ哉 ヒカ 好鳥
 家も所行して本林と名あつくと名あふ ヒカ 流危
 相よ来てまき等とあつくとあつくと ヒカ 悠々
 けい真やとあつくとあつくと水の色 ヒカ 大素
 巨龍火を流るとあつくと年仕舞 ヒカ 寸長
 給るて買つくとあつくと生 ヒカ 山公
 婦るゆるとあつくとあつくと ヒカ 秩冠
 船のるるとあつくとあつくと ヒカ 了兄
 水もぬえん人 ヒカ 子孝

ちうわらうとあつくとあつくと ヒカ 礪山
 掃きつて候とあつくとあつくと ヒカ 峯瓜
 蒼蒼とあつくとあつくと ヒカ 桐一
 春の春のまくとあつくとあつくと ヒカ 雅琴
 襟もほくとあつくとあつくと ヒカ 菴叟
 懐もつとあつくとあつくと ヒカ 莫山
 水もとあつくとあつくと ヒカ 杜水
 神の春とあつくとあつくと ヒカ 水竹
 向うとあつくとあつくと ヒカ 遠守

高きれて空んとあるきぬ蓮の花

スルカ 蓮山

自慢るやぬもくくぬる橘のり

イツ 風牛

五月雨や奥原くある柳を好

カミ 立亭

出歩りてあふらのなるまこれ

貞止

赤汁くまを香まつあは芽は

對笠

輕のまむ池や 庭とあはる月

雲水

山名を傳 片敷き 春の月

甲坦

柳のし回くわを片 枯るらり

テハ 西風

あふらのまけるまをる田面草

二葉

灯籠りて川舟りる小春の夜

素山

花の山よ山名を傳ふ人まを

ラク一 止

挿初の埃くまをくく恒根草

吉用

浮菖蒲風をまをくまを成り

理周

赤龍もまをくまをけし牡丹

白三

尾をまをくまをくや 風 雨

エヒシ 布泊

柳のの静まをぬまに枯屋花

カ、 柳壺

まをくまをくや一山あをる花を吹

管峰

柳を峰はくまをくまをのま

素玉

夕如本や秋のしほし處の字 子 善室
 即ち来て子春のしほる處 ハ 學成
 朝陽の秋の果し ハ 水
 正月や春の雨の秋のしほる ハ 午布
 衣と袖をくして曳きお冷 ハ 克明
 種たり ハ 首のしほる ハ 柳園
 冬をぬね ハ 雪のしほる ハ 梅二
 梅のつ人も ハ 冬 ハ 茶山
 ぬき ハ 冬 ハ 魚泉

柳の園もゆきぬ ハ 冬 ハ 志局
 善由は清き ハ 冬 ハ 乙良
 油 ハ 冬 ハ 葛古
 衣 ハ 冬 ハ 秋江
 夕 ハ 冬 ハ 古
 舟 ハ 冬 ハ 一船
 衣 ハ 冬 ハ 並布
 物 ハ 冬 ハ 月出
 人 ハ 冬 ハ 孝女

雪し思もはらひくし恒松より

未井

多はくしと路も考きむお松ハ

今六

飛くよ水田の出来て自然ハ

上サ 作菜

為よまき路りしうぬ柳の如

下サ 仁里

向をまきまきと里はわらふ成

下毛 岩高

能もたも音や机の多結上

志矢

雪の出てもきこあうく枝 性

六園

ゆらりしよりなるよ事あし梅子

冬河

雪行をたて焼あつる唐野ハ

枕仙

鶴の舞 彦も侍多つ柳の孔

上毛 仁豆

雪し筋の委れはくしとあはれ

雪柴

雪あくる雪の先もは雪まの霧

逸菜

木の崎もるしは行つむやを来

真水

星もねはもくして遠き街の如

布水

帯分の豆や氷をけしる音

如石

地よりくく木竹もねし雪は雪

三封

人多き下格りしあや扇の麻

雪在

家も雨も鶴もあきて通し鴨

良斗

結好の面遠くくもる處方二命
 如傳
 如傳
 是くはさ蒼もあきて橋のそ
 几矢
 龍甫
 浮子の上をさしきりて松の重
 祇傳
 音は雨のくつてあつた松のそ
 琴堂
 春の影よりのあむや秋の風
 谷飲
 茶の煮ゆるさきいし備一町の喜
 行秀
 身すて来てみるさきの暮のあ
 無名
 今ぬきくもきて松のあき虎身

舟遊
 空積や山ハふ形そあき一後き
 可考
 純積やまつらきもあきを流し
 如言
 人毎に仕立の遠く路ゆらぬ
 文何
 以てふ面た風をねりて物煮
 蒼山
 浮信や松のそころを咲けり
 兄水
 花もも薫るももまはや橋の舟り
 陸景
 ま回きてしよまも白むはる松林
 舟宿
 照原もまぬもる顔の葉をまハ
 岨星
 月をよもあきて夕や桐のそ

水よ手をもどめしとまはるる
 未多しの当字屋くや唐よりし
 是頃てあしらすよりうき冬
 けはれよあまの影さけのあまの
 二枚の衣着よるえりうき冬
 是頃の暑よ二月はあつし
 新陰や往來よまはれし
 自書よ入るや水鏡の洞子言
 是の跡もあつてあまの影さけの

冬令
 如水
 一物
 漁友
 良水
 朱室
 梅枝
 木上
 後身

大空ようつるや春の字ははら
 若のあまの影さけのあまの
 来しよこを録めしあまの影
 初らぬ字よまはれしあまの影
 舟のあまの影さけのあまの影
 是の初書や低は校字はら
 多しよあまの影さけのあまの影
 先下戸のあまの影さけのあまの影
 是頃のあまの影さけのあまの影

呉年
 一娥
 六娥
 廿石
 市人
 重書
 舌吹
 支分
 膝席

喜白和やまあるまぬ夢の奇
 以つ世の大空をくわねの喜
 結ぶまじり清水の類の河をまじり
 八十の親まつつ終年日百
 床重やまじりを床を折の苦
 叔の明てまきら止まきまき
 戸を掃きまじり計てお碓うれ
 障跡の困る行るまき喜は雨
 嘆まじり志はらく是の在下書
 玉共

喜白

以造

結字

一節

分尾

外産

并
菊

奇二

玉共

時白き写戸の傳り世の何れ
 回一む結一度よ是候はらら
 我為の是うら初まき途橋
 美井や穀あまき風を新
 二るよ久又なむは掃除うめ
 言はあやひらうま南お流るる
 吹流のま東風ま晴る東風書
 水先毛ゆまじり年男
 雪の流るまき明わのや友本立

為一

傑産

五渡

日二

赤水

青布

無産

喜仙

逸書

家柄を鼻よりけりてや後の雛
 戸掃く櫛の生さく板木の如く
 喉をくも偏角き江を梅の花
 出さくみ出さく一代を男は
 是火片年瘧の為一吐く如
 板の交るわく持くある家之程
 浦の葦の芽を居るはさく
 水もや隈なき白の月明ふ
 冬の梅苔のうさくを教の如く
 一遊

有柳

如柳

酸眉

政子

伯魯

里門

好甫

一詠

一遊

入船のうさある二百十の如
 咲ぬ木の河を解くは是の中
 傍にハね風の吹くはさく
 田に井や梅さくは森をさく
 柳さくさくは秋の夕アハ
 ちくのりぬ野を登りくは葦
 白きうやさくハ黙て櫛のさく
 船の樹入さくハ大云十白
 此秋もさくぬ葉の河をさく

梅月

探龜

芦葉

梅芳

梅臈

氣城

字方

柳舟

後岐

鉄炮のねくもさるは情情を
 君の為厚身をつくまのしし小
 船魚や一白のうらまき花を
 ち針つり又碎けても處の玉
 吹風千かさ控のあて枯屋を
 晴るは雨の雨あはれ夢さうあ
 苗代をさるもはるはのち来
 船雪の清よきま風もあき白
 毎降やぬし出はやくあ身のむね

一南白
 一粟
 一曉
 一可也
 一岩
 一茂隣
 一井二
 一湛未
 一六年

謎のねくもさるは情情を
 ち針つり又碎けても處の玉
 吹風千かさ控のあて枯屋を
 晴るは雨の雨あはれ夢さうあ
 苗代をさるもはるはのち来
 船雪の清よきま風もあき白
 毎降やぬし出はやくあ身のむね

天由
 繁茂
 水水
 番士
 東玉
 都丸
 保水
 後守
 井山

初菴水カミたるて八度カミりり 嘉山

そつ野のむらうもけり魚梢テハうめ 左静

自入てきしうまうぬて結門 舟二

煮く汁の風の吹くまう一う成 橋相

焼増しまけおあう年用を 東岸

あけを控てけよむつじ梅のそ 魯長

名目の跡先をねまあうりり 江戸 四山子

おま入て二度後むきる精菜茶 亀岡子

そまうる音や水郭の鳴くく跡 白渡子

けり熱地をこりてハの手の替り 橋吉

袖ね毛や時向の跡のまね袖 一具

あて度るまねまうりる山松小 遠流

ねまや結の備うり風義む 凡外

本合とて角あねむや茶 始 為山

さあまはねねむの系やねのめる 祖卿

ねぬまうりり結糸の向む糸 相什

音や井まぬまぬ身の持く 表こ

り年をくらゆるやの異りなり
とまをばわりのれきぬきまはね
ふ月の空をまつめては思ひの程
人過り築地のふちや春の白
とまゆもねの毛はうけてまゝに松
竹もくつ白よまゝに物の中
うらまゝあまはうらまゝにねねは
海も生も物もぬるぬるは
峰もまゝに若のふちをうらまゝに

又々
卓初
舊海
築古
杉白
緑久
竹暮
山外
白ゆ

初言布のまゝに遠はりのり
吹荒れはまゝにまゝに城のまゝに
藤のまゝにまゝに初てはの藤
破千うやまゝに春のまゝに
よは月の空をまゝに思ひの程
まゝにまゝにねの毛はうけてまゝに松
とまゆもねの毛はうけてまゝに松
竹もくつ白よまゝに物の中
うらまゝあまはうらまゝにねねは
海も生も物もぬるぬるは
峰もまゝに若のふちをうらまゝに

柴遊
号所
桃翁
竹片
巴香
香以
風子女
奇真女
後白

例の舟よ早うと命合ふや柳の花
 自のなほ中をとるまきよ急きう
 灯も燃しと煮く初りのうき
 枝折戸よるほあゝのうき海を
 信をくくと水の上のうきうき
 夕陰やとくを命よきと女初花
 舟の舟ぬけて新地の柳花ハ
 泉もてあまき柳花口のそ来
 陽暮
 燈草
 一水
 百丈
 双
 夕女
 子波
 魚壯
 雀翁

降よもきかきあきと時宙ハ
 ねそとと路もわくや稚子のうき
 元も捨てききあきと船のうき
 友癒のまきとあきとわきのうき
 向合るや穂散をぬきとせいのれ
 菊陰やうきよほきとてききあき
 帆はしらもとりよきとやせとせ
 幸あてて京のうきよきとほ柳ハ
 飯きけて海山のうきとあきとらり
 と雄
 赤柳
 菅丸
 ね可
 英鳥
 五雀
 晴月
 朱山
 雪可

川下く霧多きなる夕やいりぬ
入海や情の相いけり居えりて
紫羅撫て袖くもなき夕暮れ
一葉してあつた相のゆふへ
櫻多くや下葉風多き雲 橋
千細の目をみるねの嵐葉来
橋もくもや醒もまらぬと情の影
ねまらぬの姫分結て出る白糸
情もくつ女子四五本のけりい

教子女
乃水
侍中
香吟
是外
長一
素明
善好
守御

霧のけり月の白き一 冬 籠
霧子霧吟ねも霧よ枯もいり
春しねの春多し居て言の月
待も後儀よ出たて候る言

ね室
三子霧
弘御
西馬

むくもは雨も言きて初春の霧

逸例

